



# 用賀中だより

## 民泊体験で見えた、生徒たちの力

ようがの学び舎 世田谷区立用賀中学校 校長 毛利 慎治

秋の気配が少しずつ感じられるようになりました。保護者の皆様、地域の皆様には、日頃から本校の教育活動を温かく支えていただき、ありがとうございます。

三年生は、9月9日から11日まで、2泊3日の修学旅行で福井県と石川県を訪れました。北陸の自然や文化に触れ、工芸の体験など、東京ではなかなかできない経験をすることができました。

どの訪問先にも大切な学びがありましたが、今回、私が特に心に残ったのは、福井での民泊体験です。

民泊先で生徒たちの様子を見てみると、自分から挨拶をしている姿がありました。初めて会う方のお話を聞き、興味をもったことには「やってみよう」という気持ちで関わっていました。慣れない場所ですから、もちろん緊張もあったと思います。それでも、温かく迎えてくださる方々との間で、生徒たちは自然に一步を踏み出していました。

私は、その姿を見ながら、「これが民泊体験のよさなのだろうな」と感じました。

学校では、私たち教員が「挨拶をしましょう」「自分からやってみよう」と声をかけることがあります。しかし、民泊体験では、誰かに言われる前に、生徒たちが自分から挨拶をし、人に関わろうとしていました。

相手の話をもっと聞いてみたい。目の前のことをやってみよう。

そんな気持ちが、そのまま行動につながっていました。

私たちは、生徒に何かを教えたり、できるようにしたりしようと考えがちです。しかし、今回の姿を見てみると、生徒たちの中には、すでに自分から学ぼうとする力があるのだと改めて感じました。その力が自然に引き出される環境をつくることも、学校教育の大切な役割なのだと思います。



民泊先で伺ったお話も、とても印象に残っています。

東京など都市部で暮らした後、福井に移り住んだ方々との出会いがありました。中でも、千葉県から移住されたご家族のお話は、今でも心に残っています。

息子さんが福井の海に魅せられ、「この海で塩をつくりたい」と願ったことが、移住のきっかけだったそうです。現在、海水から塩をつくる取組を進めていると伺いました。

また、ともに移住されたお父様の「私は、この場所で最期を迎えたい」という言葉からは、この土地への深い思いが伝わってきました。

人は、どこで暮らすのか、どのように生きるのかを、自分で選ぶことができます。

中学生にとって将来というと、「何になりたいか」「どんな仕事に就きたいか」と考えることが多いと思います。しかし、それだけではなく、「どこで暮らしたいか」「どのような生活を大切にしたいか」と考えることも、生き方を考えることの一つです。

実際に自分で選択をしながら生きてきた方の言葉には、教室の中だけでは得られない重みがあります。

修学旅行は、名所を訪ねたり、歴史や文化を学んだりするだけのものではありません。人と出会い、その人の考え方や生き方に触れることも、大きな学びです。

そして、今回の民泊体験では、生徒たち自身が、人との関わりの中で自分から動く力を見せてくれました。

挨拶をする。話を聞く。興味をもつ。やってみる。

一つ一つは小さなことかもしれませんが、しかし、誰かに言われたからではなく、自分から動くということには、とても大きな意味があります。

今回の2泊3日の修学旅行を通して、私自身も、民泊体験がもつ教育的な価値を改めて感じるようになりました。そして何より、生徒たちには、すでに自分から一步を踏み出す力があるということを、改めて教えてもらったように思います。

生徒たちを温かく迎え、暮らしや思いを伝えてくださった民泊先の皆様に、心より感謝申し上げます。また、修学旅行を支えてくださった保護者の皆様にも、改めて御礼申し上げます。

これからも用賀中学校では、生徒が自分で考え、自分から一步を踏み出し、人との出会いの中から学んでいける、そんな教育活動を大切にしていきたいと考えています。



## 「修学旅行の思い出と成長」

3年B組 高谷 イーサン クリスチャン

私は、先日あった修学旅行は、充実していて、とても楽しかったです。その中でも三つ大きな思い出があります。

一つ目は、初日の金沢市内の観光です。初めて行く場所で仲間と一緒に事前に決めたルート歩きました。歩いてい

る道中では様々なハプニングや予定外のことがありましたが、協力することができました。初めは、近江市場でお昼を食べることにしていました。しかし、肝心の店が見つからず長い時間彷徨っていました。班員と話し合い、店を変えることにしました。次に、ひがし茶屋街に行くと、道中で知らないおじさんと出会い、その人の店に案内してもらいました。その人は、どうやらガイドの人で、私たちに、ひがし茶屋街の効率的かつ景色を一番楽しめる行き方をおしえてくださいました。おじさんが教えてくれた道で行ってみると、自分たちだけでは行けなかった場所を通ることができました。この経験からガイドさんの大切さや重要性について少し気づくことができました。現代では、私たちの班も言っていたようにスマートフォンで道を調べるのが主流となっています。そのせいで、観光場所に行くことが目的となっているように感じます。しかし、ガイドさんの存在により街の風景や移り変わりを感ぜられ、新鮮で魅力的な旅をすることができると思いました。私は、ガイドに対しての考え方が変わりました。

これ以外にも、一日目は、行き先を度々変えたり、少し休憩の時間を取ったりと、臨機応変な旅だったと思います。このように、一日目には、様々な経験をする事ができ、成長することができました。

二つ目は、二日目の民泊体験です。福井県の鯖江市という場所で民泊体験をしました。外に出ている岩礁に登ったり、トランポリンの上で飛んだり、うどんを粉から作ったりと、東京では、絶対にできないことを、たくさんすることができました。普段は、料理を全くしないので、ほぼ初めてで、楽しかったです。しかし、案の定、包丁の使い方や料理の仕方はから

つきして、とても難しかったです。

三つめは、三日目での、和紙づくり体験です。和紙のつくり方は、テレビで見たことがあったのですが、それとは、少し違っていておもしろかったです。作った和紙は、かざりつけをして、しおりとして使っています。

この、三日間で私は、たくさんの思い出をつくと共に、成長することができました。これからの学校生活では、修学旅行で学んだことを活かして生活していきたいです。



## 「当たり前が当たり前じゃない」を実感した 3 日間

生活指導主任 田嶋 竜之介

約 2 年ぶりとなった宿泊行事。ほとんどの生徒にとって初めて訪れる街や慣れない環境での生活は、楽しみな気持ちと不安が半々のスタートでした。修学旅行の前々日が休校になるなど、出発の日が近づくにつれて 3 年生のフロアにはどこか緊張感が漂い、前日まで現地は大雨の予報。「この学年は雨男・雨女が多いね」などと話していたほどです。

しかし初日の朝、見事な晴天のもと、参加者全員が遅刻することなく笑顔で集合しました。当たり前のように思えて、実はとてもありがたいこのスタートに、「きっと素晴らしい 3 日間になる」と確信した瞬間でした。

初日の金沢市内での班行動では、生徒たちの確かな成長を感じさせられました。事前学習で「何かあればすぐに本部携帯へ連絡するように」と伝えていましたが、当日はトラブルの電話が一回も鳴りませんでした。2 年生の校外学習では「電車が動いていません」などの電話が相次いだことを考えると、見知らぬ土地で時間を見越し、一本前のバスに乗るなど自ら考えて行動できた証です。「当たり前に順調に過ごす」ことの裏にある、生徒たちの自律する力に驚かされました。

2 日目の民泊体験では、人の温もりという「特別な出会い」がありました。最初は緊張から少し距離を感じていた生徒たちですが、お昼過ぎに巡回へ行くと、すでに心を許し笑顔で会話を弾ませていました。3 日目朝の退村式で見た別れを惜しむ姿や感謝の表情は、普段の学校生活では得られない、かけがえのない経験となったことを物語っていました。

最終日は伝統工芸体験や初めての飛行機に胸を躍らせ、無事に帰路へつきました。羽田空港で保護者の皆様に温かく出迎えていただいた時、見慣れた光景の中にホッとした表情を浮かべる生徒たちの姿が印象的でした。

恵まれたお天気、あたたかな現地の方々、そして生徒たちが安心して自主的に挑戦できる環境を温かく支えてくださった保護者の皆様。私たちが普段過ごしている「当たり前」の裏には、多くの方々の支えと感謝すべき環境があるのだと、改めて実感した 3 日間でした。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

